

鋼の錬金術師のSS詰め 箱

カルティス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、とある錬金術師の世界のお話。

別世界要素もたまにある。

本編ガン無視もたまにある。

ホムンクルスとの絡みもある。

なんでもありのSSを集めた箱です。

ご自由に閲覧どうぞ。

目次

『そんな君が』リン・ヤオ	1
『それだけでよかったのに』グリード（グ リリン）	7
『好き、とは——』ゾルフ・J・キンブ リー	11

『そんな君が』 リン・ヤオ

「ねえ、リン」

「……」

「ねえリンってばー！」

リン・ヤオは屋根の上にあった、ある一人の少女を連れて。

彼女はこのひと月の間にセントラルに堕ちてきた、別世界の人間だという。

彼女は錬金術とはまた違う不可思議な術を使った。

それにより戦線に加えられた彼女は、明日、約束の日に戦場に向かう。

そのまま、帰らぬ人になる可能性もある。

そのまま、基の世界に帰ってしまう可能性もある。

考えたリン・ヤオは、彼女を今夜一時的に連れ出すことに決めた。

最後になるかもしれない、会話をするために。

「なあ」

「何?」

「明日、だな」

「……うん、そうだね」

「もう、帰るのか？」

「そうかもしれない。わからないよ」

「本当二、突然だったのか」

「うん、本当だよ。だから、規則性がわからない」

「つまり、戦いの最中に消えるかもしれないのか」

「そう、なるかな。我ながら馬鹿みたいだよ、本当」

彼女は空を仰ぎ見た。自身が落ちてきたであろう空は、星を瞬かせていた。

「……ね、リン」

「なんだ？」

「リンが私を呼んだ理由は？もう真夜中だけど……」

「……言いたいことが、あつて」

「うん」

彼女はリン・ヤオの言葉を待っていた。

「——君が、好きだ」

「……え」

「君が、好きだ」

「ええ、は、え」

彼女は酷く狼狽していた。

「なんで、そんな、だって」

「だってクソもない。——だから、失いたくない」

彼女は狼狽しながらも、下を向いた。

そして口を開いた。

「私と君は、生きてる世界が違いすぎるよ」

「わかってル」

「わかってないよ、リン。そもそも君は皇帝の子で、私は一般人。その上、生きてる世界も違うの。」

「そんなこと、分かってル！」

「なら、なんで……！」

生きる世界も、身分も、生活も。

何もかも違うのに、どうしてこんなことをいうのか。

彼女は理解できなかった。

リン・ヤオはただ、こう言った。

「好きだからダ」

「……う、そ」

「嘘じゃない」

リンは、普段意図的に閉ざしている目を開けた。

「この目に誓ってそう言おう」

「……」

「だからもし、生きて帰れたならシンに来てほしい」

彼女は、黙ったままだった。

「ごめんなさい」

漸く口を開いたとき、彼女はそう言った。

「私、アナタの好意は受け取れない」

「どうして？世界が違うから？」

リンは、激高することなく静かに尋ねた。

ただ、知りたくて。どうしても、彼女の本意を知りたくて。

「……私、いままで恋とか恋愛とか、したことなくて」

「だから？」

「私、きっと貴方を傷つけてしまう。いつ消えるかも分からない。国も、文化も地位も違

うし……」

リンはそれを聞いて、納得できなかった。

彼女に、嫌いだとか、他に好きな人がいるとか、明確な理由がないことはリンを安心させ、同時に絶望させた。

「……たとえ、グリードが望んでいるとしてモ？」

「……リン！」

彼女がグリードに気があるような振りをしていたのは、周知の事実だった。

実際にそれを利用して侵入したこともあった。

それはリンを苛立たせることもあれば、リンに優越感を与えることもあった。

リンとグリードは共生していたからである。

ともに生きているからこそ、嫉妬することもあれば、逆に悦に入ることもあった。

だからこそ、リンは言葉を選ばなかった。

彼女が、どうしようもなく欲しかったから。

好きだから、愛していたから。

結果的な副産物でこそあれ、彼女が傍に居てくれることがリンの望みだったからだ。

好きだと気付いたのが遅かったからともいえる。

好きだということに気が付いたのは、グリードが体に侵入してきた後だった。

グリードが自身の体を使って彼女と接触するたびに、嫉妬がリンを襲った。

それで漸く気が付いた。

「君ガ、好きなんだ」と。

「ごめん、なさい」

それでも、彼女は首を縦に振らなかつた。

挙句の果て、彼女はこう言つた。

「好きになつてくれて有難う、リン。——嬉しかった」

そんな事をいう彼女は、残酷だつた。

だが、リンはこうも思つた。

（ああ、だから。だから彼女を好きになつたんだ）

思わず、リンは彼女を抱きしめた。

彼女も驚きこそしたが、抵抗することはなかつた。

星は、瞬き続けている。

月は静かに佇み、二人の影を屋根に作つた。

『それだけでよかつたのに』 グリード（グリリン）

手紙が届いた。宛名は何も書かれていなかった。

私自身にそう言恋つた関係人の人間はいなかったから、本当に驚いた。

封筒はシンプルな物で、真つ白無地。柄もなければ文字もない。

ただ、私の名だけが書かれてあつた。

誰が書いたのか、なんて分からなかった。

知り合例の件いは殲滅でほとんど失つていたし、他に宛も居なかつたから。

「開けないのかい？」

受け取つた本人である母は、私にそう聞いた。

「だって、誰が書いたのか分からないのよ。怖くない？」

「読んだら分かるじゃあないの。それに、脅迫とかなら捨ててしまえばいいわ」

そう言われて、それもそうか、と納得した。

が、人前で開ける主義ではなかつたので私は自室に戻ることにした。

開けてみると、思ったよりも存外汚い字が出てきた。

普段、文字を書かない人なのかなとも感じた。

私はゆっくりと目を通し始めた。

「……………う、そ。なに、これ」

書かれていることは、衝撃以外の何物でもなかった。

グリード。

酒場デビルズネストを拠点に活動する、何でも屋のような人。

一度や二度、では済まない程、私は彼と話したことがある。

元々あの酒場に母も父もよく行っていたから。

大人になった私も、比較的よく訪れていた。

知らず知らずのうちに、仲良くしていた———ような気がする。

自然とそうなっていたから、どういう理由^{ワケ}だったかは覚えていない。

気が付けば、デビルズネストは崩壊していた。

マートルも、ドルチェットも、ビドーも、ロアも。

皆、居なくなっていた。

———もちろん、グリードもその姿を消していた。

デビルズネストは荒廃し、誰も近寄らなくなった。

無論私もそうだったし、母もそうだった。

この手紙には、その『グリード』に何があつたのか———その顛末が書かれてい

た。

ホムンクルスだとか、転生だとか、意味の分からない言葉ばかりあって。

なにも、私には、なにも分からなかった。

ただ、分かっていることは。

「……生きてるってこと？グリードが？」

その時。

頭に濁流のように言葉が、感情が、“思い”が溢れ出した。

「なんで教えてくれなかったの」とか、「何で皆黙っていたの」だとか。

そんな不満ばかりではなくて。

生きてくれている事の喜びと、愛おしさと。教えてくれた、特別感があった。

そこまで感情が爆発して、漸く。

『好きだったんだ』と気付いた。

どれ程時間がかかったのだろう。こんな、ちっぽけで単純な感情に気が付くのに。だから私はデビルズネストに通っていたんだって。

話しかけたりしてたんだって、今になって気が付いた。

「……ばーか」

私も、こんな手紙を寄こした彼も。グリード

二人とも揃って馬鹿だな、なんて笑った。

今になって手紙を寄こしたのはきつと何か理由があるのだろうことは、私にも理解できた。

ただ、最後に「二度と会う事はないだろうが」なんて、余計な文言はいらなかったと、私は思った。

「あら、どうしたの。ちよつとご機嫌ね？」

「えへへ、ちよつと、ね」

「ああ、そうだった。あの手紙、なんだったの？」

私は少し考えてから、こういった。

「さあ、どうだったかなあ」

『好き、とは——』ゾルフ・J・キンブリー

1903年、中央司令部

1903年。キング・ブラッドレイ大総統閣下が就任された1894年から早9年。アメストリスの中央セントラルは多くの軍人で溢れていた。

多くの若者が志願し、軍人になるのはもはや当たり前の様になっている。

自分は、といえば。

セントラル中央に居を構える喫茶店に勤めていた。

セントラル中央にある店の例に漏れず、利用者の半分が軍人を占めている喫茶店だった。

勤め始めたのは、おおよそ2か月前。

ある理由があつて、自分はここに勤めることになった。

コーヒーを淹れるのも、サンドイッチを作るのも、もはや日課のように自然にできる様になった。

そんな、ある日の事。

似たような青い軍服が店の大半を占めるようになる12時。

この喫茶店のマスターに、自分は配膳から呼ばれた。

「はい、なんでしようマスター」

「いや、なに。まだお前には常連は教えてなかったな」

「常連さん、ですか」

殆どが軍人で、同じ軍服を着ているのにマスターには分かるのだろうか。

「ああ、あそこの——そう、一つ星のついた、腕章をつけた人だ」

三本線のラインの真ん中に一つのが付いた腕章、それをつけた人をマスターは指さした。

黒く長い髪を一纏めにした、軍人にしては少しやせ型の男性……男性？だった。

「あの人が、ですか？ほかの人もいつも見ますが……」

「彼は5年程前からこの店に来てくれていてね。よろしく頼む」

よろしく頼む、とは。恐らく挨拶しておけ、ということなのだろうが余りにもアバウトではないだろうか。

彼の注文品であろう盆を渡された自分は、いそいそと軍服の間を通り抜け、その男に近づいた。

「こちら、ご注文の品です」

そう口には出したが、自分はどうか挨拶すべきかをずっと考えていた。

「ああ、有難う御座います——おや、初めて見ますね」

「え、ああ、はい。2か月ほど前からここに勤めてます」

「そうだったのですか。初めまして、私はゾルフ・J・キンブリーといいます」

キンブリーは狭いながら優雅にそう言った。所作からして、軍人ではあるが良い生まれのように思えた。

「常連さん、だとか。いつも有難う御座います」

「いいえ、ここは立地がいいですから。……数年前まではここまで人は多くありませんでしたがね」

「あはは、最近では軍人さんのお陰で盛況なもので……」

自分は数年前の風景をしらないが、そうなのだろう、とは思った。

ここ数年で軍人は倍近く増えていた。その影響は中央セントラルが最も受けているだろう。

客数が増えるといえ、聞こえはいいだろう。だが、それによつて治安が不安定化しているのもまた事実だった。

「おーい、すまない」

「！はい、かしこまりました！少々お待ちを！……すいません、キンブリーさん。これで失礼します。ごゆつくりどうぞ」

「ええ、仕事中呼び止めてすみませんでした」

自分は急ぎながら、ぶつからない様に軍服の間をすり抜けた。

「まったく、時間が時間でしたか」

これが、ゾルフ・J・キンブリー——
“紅蓮”の名を持つ錬金術師との出会いであつた。

幾度目かの遭遇

そんな出会いから数か月。

軍部の動きが活発化し、セントラル周辺の店から青い軍服の姿が減ってきた頃。

面と向かつて話せるほどには、軍人の数が減つてきた頃。

「ああ、お久しぶりです」

「あの時の。お久しぶりです、キンブリーさん」

何時もの、というより前と同じ席に座つたキンブリーさんは、前と違って大量の紙束を持っていた。

「お仕事ですか？」

「ええ、まあ。軍人ではありませんが、またこれは別口で」

「軍人は大変ですね」

「仕事、ですから」

そういつて、キンブリーさんはコーヒーに口をつけた。

まるで、仕事か恋人のような人だ。

「今日はお暇なようですね？」

「え、ああ。最近お客様が少しだけ減りましたから。経営には、今の所影響はないですけど」

「そうですか、なによりです。潰れてもらっては、気分転換もままなりませんので」

気分、転換とは。ここにまで仕事を持ち込んで気分転換とはどういう事なのだろうか。

変わっている人だ、と思った。

「こんにちは。お元気でしたか」

「キンブリーさんでしたか。そちらもお元気そうで何よりです」

また別の日。またキンブリーさんはうちの店に来ていた。

「おや、今日は何時もと仕事が違うのですね？」

「ええ、まあ。コーヒーにも種類があります」

「これは？なんというのです？」

「エスプレッソ、といます。とても苦くて濃いものですが、根強い人気もあります」

「貴方は飲むんですか」

「いいえ、私は余り。……苦いの、苦手なんです」

「ほう、初耳でしたね。意外です」

「よく、言われます」

彼は偏見をあまりしない人だ。

何時もなら、喫茶店の店員なのに？と無茶苦茶な事を言われる。

が、彼はそれもそれぞれ、という様にいうのだから、本当に変わっている。

彼と自分は何度も顔を合わせた。

自分は人の顔を覚えるのは苦手なのだが、不思議と彼だけは正確に一発で覚えていた。

そんなことを親に言ったら、「そういう奇縁もあるだろう」と言われた。

それもそうか、と特段気にすることはなかった。

——あの日、までは。

士官学校と、中途退校

自分は、人を傷つけるのは苦手だ。

親もそうだったが、暴力や喧嘩、というものが点でダメだった。

それというのも、士官学校に入れられたからだ。

自分の親戚に、少将や大佐ほどまで上り詰めた人がいた。

その人は存命で、よく自分の家に来ていた。当然、自分が大きくなればなるほど軍に入るように言った。

男である、というのがその人からすれば羨ましく映ったらしい。

その人自体は男だったが、娘ばかりの家族構成らしい。そのせいで余計に急き立てられたのだった。

両親はそのことに難色こそ示したが、結局自分を士官学校へ送った。

その人に恩があつたのか、何かしてもらつたのかはわからない。

結果自分は士官学校で学びたくもない。人を殺す術を学ぶことになつた。

自分が、決定的に暴力に嫌悪感を持つようになったのは、同級生がきっかけだった。彼らは自分と馴れ馴れしくすることはなかつたが、よく近くにいることが多かった。話しかけられることも多くはあつた。だから、そこまで彼らに嫌悪感はなかつた。

——なかつた、のだ。

それは、訓練の後。

銃撃戦を想定した仮想訓練の後だった。

銃のメンテナンスを兼ねた分解をしていた時の事。彼らは物陰に居た自分に気付いていないようだった。

彼らはそのまま寄宿舎に戻ろうとしたのだろうその時に、こういつたのだ。

「お前、軍人になつた理由ってなんかあるか？」

「いんや。強いて言うなら金かな」

「だろいなあ、ていうか最近の奴ってそういう奴ばかりじゃね？」

「家のメンツとかもあるだろ。彼奴とかそうじゃねえか」

「あー、彼奴な。ま、どーせ大半が金だろ」

「ま、うちの国戦争とか戦いとかで負けたって聞かないしな」

「ははは、そうだったわ。いやあこの国に産まれてよかったなあ」

——ゴン、と鈍い音が遠くで聞こえた、様な気がした。

それは、頭の奥の方から聞こえたようにも思える。

酷い衝撃だった。

こんな、こんな不純な、国を守るためだとかの崇高なものじゃない、こんな不純な理由で暴力が許されるのか。

こんな不純な理由で、人を、国を滅ぼしにいくというのか。

吐き気がした。

汚泥を固めたヘド口を吐き出しそうな、そんな吐き気だ。

この吐き気は、きつと、彼らだけに向けられたものじゃなかった。

——似たような理由で「「r b : 士官学校 > ココ」に居る自分に向

けられたものだったのだ。

それから、自分は三日三晩寝込むことになり、なし崩し的に士官学校を中退した。

自分が軍人になることに否定的だった両親は、そんな自分を受け入れてくれた。それだけが、当時の自分の希望だった、ような気がする。